



Title	内モンゴル牧民の分割相続と家畜飼養形態の変化：赤峰市達木ガチャーの実態調査から
Author(s)	敖敦図雅; 坂下, 明彦; 正木, 卓
Citation	フロンティア農業経済研究, 24(1), 20-28
Issue Date	2021-11-20
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/90258">http://hdl.handle.net/2115/90258</a>
Type	article
File Information	24(1)_02_Tuya.pdf



[Instructions for use](#)

## 内モンゴル牧民の分割相続と家畜飼養形態の変化 －赤峰市達木ガチャーの実態調査から－

北海道大学大学院農学院 敖 敦 図 雅\*  
北海道地域農業研究所 坂 下 明 彦  
酪農学園大学 正 木 卓

A Study of Nomadic Herders' Inheritance Practices and  
Changes in Herd Management in Inner Mongolia  
－From a fact-finding survey of Damu Gacha in Chifeng City－

Aodun Tuya<sup>a</sup>, Akihiko Sakashita<sup>b</sup> and Masaki Suguru<sup>c</sup>  
<sup>a</sup> Hokkaido University Graduate School of Agriculture  
<sup>b</sup> Hokkaido Regional Agricultural Research Institute  
<sup>c</sup> Rakuno Gakuen University

### Summary

The main method of animal husbandry in the Inner Mongolia region of China was nomadic pastoralism. However, nowadays there is a tendency for the feeding of livestock to be completed individualized and privatized due to the increase of enclosed pastures, the buying and selling of silage taken from the grasslands, and the cultivation of forage crops in agricultural fields. These factors caused a major change in the management and feeding of livestock. Previous studies on this topic pointed to land individualization as a major factor in the change of herd management, however very few studies take into consideration factors such as population growth and changing family dynamics. To fill this gap in the literature, this study focuses on the interplay of inheritance interplays with population growth, which has a great influence on family formation in inner Mongolia.

This study shows how the interplay of population growth and inheritance practices influence herd management styles in the Inner Mongolian region. In particular this study will cover how herds are inherited and how this in turn impacts the scale of livestock ownership. Fieldwork was conducted in Damu Gacha, a pastoral village located in the eastern part of the Inner Mongolia Region.

### I はじめに

中国内モンゴル自治区<sup>注1)</sup>(以下、内モンゴルと省略)の家畜飼養形態<sup>注2)</sup>は、牛や羊などの家畜を群れに統合し、草を求めて移動を繰り返す遊牧

であった。しかし、現在においては、囲い込まれた牧草地での放牧や草地の採草利用とその売買、農地化による飼料畑の増加により、家畜への飼料供給が個別完結化する傾向が現れ、飼養形態に大きな変化が生じている。

\* Corresponding author : hosikasumi@icloud.com

この家畜飼養形態の変化の要因については、干[7]は定住化による放牧地面積の縮小と生産請負制の実施による草原の私的利用の強化にあるとしている。吉雅図[8]は、個別経営化と家畜飼養頭数の増加による過放牧が草原の砂漠化を招いたとし、自給飼料生産の拡大による舎飼いへの転換を主張している。以上の先行研究では、中国における生産請負制の導入が個別経営化を促進し、草地の利用形態が共同利用から個別利用に変化したことを指摘している。これらの知見に基づけば、牧民の家畜飼養形態の変化の原因は、土地の個人への分配であると考えられる。

しかし、モンゴルの遊牧家畜飼養形態においては、家畜の群れ管理が基本となっており、家畜の群れの規模によってその労働組織のあり方が変わるという柔軟性がある。小長谷[2]は、動産<sup>注3)</sup>を基本とする社会では、技術や機能に応じて比較的容易に富が形成される。技術的に優秀な牧民は動産が増えやすく、家畜が増えると妥当な家畜群の規模を越えてしまい、従来の労働組織の構成が適正ではなくなる。したがって、労働組織のメンバーシップはより柔軟であるとしている。

家畜の群れは数家族<sup>注4)</sup>の家畜の統合によって構成されている。内モンゴルでは、家畜の群れの規模は変化が少なく、羊の場合200~300頭を一単位として管理されてきた<sup>注5)</sup>。これよりも大きな群れ単位となると、遊牧路や草地の荒廃や、家畜の疾患などが発生する恐れがある。例えば、体の弱い子羊や老いた羊などが草や水を十分に摂取できず病気が発生する。逆に群れが小さすぎると、羊が落ち着いて草を食べず家畜管理が厄介になり、オスとメスのバランスの問題が発生したりする。つまり、群れが適切な規模でなければ、技術的な管理が難しくなり、繁殖にも問題が発生するのである。

群れの規模が一定であるため、1世帯当たりの平均家畜飼養頭数によって群れに統合される家畜

の世帯数が規定されることになる。世帯当たりの家畜飼養頭数が少なければ群れを形成する世帯数が増え、群れを形成する労働単位が拡大する。平均飼養頭数が大きくなると逆となる。このように、家畜の群管理においては、一世帯あたりの家畜数が家畜飼養形態の変容を左右する重要な要因となる。

そこで、本論においては、人口と家族の視点を重視し、家族形成に大きな影響を与える相続に注目して家畜飼養形態の変化を明らかにすることを課題とする。具体的には内モンゴルにおいては分割相続<sup>注6)</sup>が基本であるが、その過程で財産分与がどのように行われ、相続後の経営規模の変化により群管理を中心とする家畜飼養形態がどのように変化するかを明らかにする。

対象とするのは内モンゴル自治区東部に位置する伝統的な牧畜村である達木(ダム)ガチャーである。2019年に実施した12戸の牧戸調査のなかから、典型的な世帯を取り上げて分析する。相続による世帯分化の過程において家畜飼養形態がいかに変化し、個々の世帯の家畜の共同管理がいかに編成されていくかについて、家畜が個人配分された1981年以降の変化をトレースする。

注1) 内モンゴル自治区の行政単位は自治区、市(盟)、旗、蘇木(ソム)の4つのレベルからなり、一般の中国行政単位では、自治区が省、市あるいは盟は市、旗は県、蘇木は郷鎮に相当する。蘇木の下にある自治組織がガチャーであり、一般農村の村民委員会に相当する。

注2) 家畜の飼養形態は遊牧、放牧、舎飼いという3つの類型に区分される。

注3) 動産とは家畜のことである。詳しくは小長谷[2]を参照のこと。

注4) ここでいう家族とは、世帯に相当する概念であり、生計を共にする家族集団を指す。中国の戸籍制度では、子供が結婚すると、親の

戸籍から独立して、新しい戸籍を有することになる。詳しくは蘇德斯琴[4]を参照のこと。

注5) 群れの規模は内モンゴルの各地域の気候、草量、土地の面積と地勢、水資源などによって異なる。この規模は次に見る対象地の標準である。

注6) 齊[3]はモンゴル社会における末子相続について次のように説明している。モンゴル社会においては、小家族が一般的な家族単位であり、結婚して独立するという価値観から、兄弟は結婚して、家族を作成し、歳上の方から順に独立していき、小家族の単位になる。その際、最後に残された末子が親の家屋に住み、つまり親の扶養を任されることになる。しかし実際の後継ぎは末子とは限らず、様々な条件によって決まる。例えば、本論の事例として取りあげた家族においては、両親が死亡した時点で、四男Uと同居していたため、彼が跡継ぎとなった。四男Uは両親の代わりに、五男Sと姉妹の結婚・独立を見届けるという「親の義務」を担うこととなった。また、財産分与については、男子に財産としての建物、家畜、土地を比較的平等に分配するのが一般的である。後継ぎとなる男子は親と共同で財産を作り、親の扶養を担うため、他の兄弟より相続する家畜の頭数が多くなる。

## II 達木ガチャーの概況

対象地である達木ガチャーは内モンゴル自治区赤峰市アルホルチン旗に属する牧畜村である。アルホルチン旗の面積は14,277km<sup>2</sup>であり、7鎮、4ソム(蘇木)、3郷を管轄エリアとし、その下に245の村民委員会がある。総人口は約30万人、そのうちモンゴル民族人口は12万人で、総人口の4割である。

達木ガチャーの総面積は4,359ha (65,391ムー、

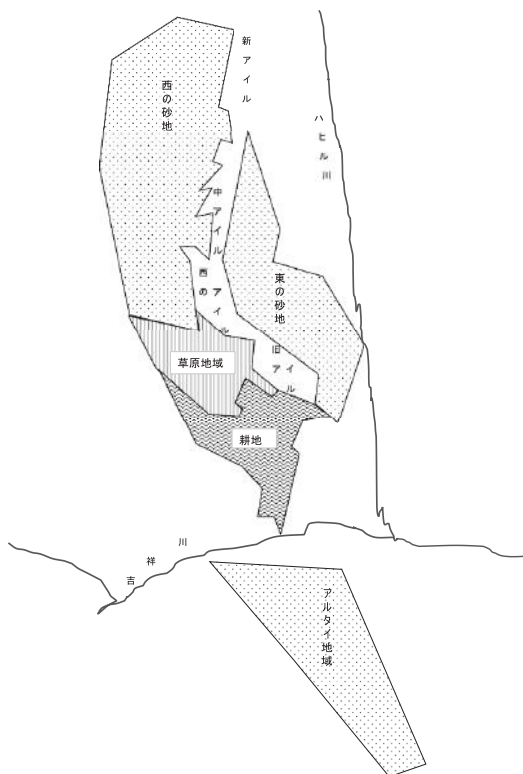


図1 達木ガチャーにおける牧草地の分布

1ha=15ムー)、農用地面積は4,042ha (60,631ムー)であり、そのうち、草地の個別請負面積は3,580ha (53,707ムー)、ガチャーの共有地面積は461ha (6,923ムー)である。また囲い込まれた牧草地面積は2,876ha (43,152ムー、80.3%)、飼料を栽培する耕地面積は160ha (2,397ムー、4.5%)である<sup>注7)</sup>。地勢は西北部が比較的高く、東南部が低いが、一帯は平坦地と砂地となっている。アルホルチン旗北端の山脈に源を発するハヒル河が達木ガチャーの東側を流下しており、南部を流れる吉祥河と達木ガチャーの東南部で合流している。その合流地点付近は、豊かな水資源と肥沃な土壌を持つ優良な草原地域(平野)であり、灌漑地や採草地となっている。しかし、その他の地域は乾燥した砂地であり、放牧が行われている。

図1は達木ガチャーにおける牧草地の分布を示

している。牧草地は、西の砂地733ha(11,000ムー)、東の砂地433ha(6,500ムー)、アルタイ地域667ha(10,000ムー)、草原地域2,400ha(36,000ムー)と大きく4に分けられ、夏と秋には西の砂地、東の砂地、アルタイ地域、冬と春には草原地域がそれぞれ家畜の放牧地として使用される。

「家族請責任制」の実施により、牧民たちは家畜と土地の分配を受けている。1981年に家畜分配が行われ、一人当たり馬0.5頭、牛1頭、羊3頭、ヤギは世帯あたり3頭の基準であった。

1997年の全国における草地請負制度の実施に伴い、達木ガチャーでも土地の使用権はその時点以降30年間変更しないという契約のもとで、世帯への分配が行われた。土地は、牧草地と農地に分類され、分割基準はそれぞれ異なる。農地は配分時点の人口のみによって配分され、4ヶ所の牧草地それぞれに1ヶ所ずつ、人口(70%)と家畜頭数(30%)基準に応じて配分がなされた。家畜での配分は羊を単位とし、牛1頭=羊5頭、馬1頭=羊6頭、ヤギ1頭=羊1頭で換算し、世帯の家畜の換算頭数により配分面積が計算された。

つぎに、1981年から2017年までの人口、世帯数、家畜飼養頭数の変化を表1に示した。人口は1981年の455人から97年の508人まで11.6%の伸びをみせるが、2017年には537人と5.7%の減少となっている。世帯数は1981年の77戸から97年の111戸(変化率44.2%)、2017年の183戸(同64.9%)と

増加を続けており、家族の分割が進行していることを伺わせる。この結果、世帯当り家族構成員数は5.9人、4.5人、2.9人と減少している。少子化、若年層の流出も含むであろうが、家族分割の影響が大きいと考えられる。

これに対し、換算家畜頭数は1981年の9,843頭から97年の12,464頭(変化率26.6%)、2017年の30,194頭(142.2%)と増加傾向にあり、特に近年の増加は著しい。この結果、世帯当りの家畜換算頭数は1981年の128頭から1997年には世帯分割により112頭にまで減少するが、2017年には家畜相当数の急拡大の下で165頭になっているのである。このことは、1997年の土地分配の影響を受けているが、世帯間の家畜の共同管理にも作用していると考えられる。

注7) 宝力招(ポリジョ)ソム政府の統計による。

### III 調査対象家族の歴史的変化

ここでは、図2に示す家系を対象として、主に親世代、子世代について、相続を含む家族世帯の変化や家畜飼養の変化を追跡することにする。

対象家系は、人民公社時代に達木生産小隊に隣接する尚申毛都生産小隊に属する「7世帯」ホトアイル<sup>注8)</sup>に居住していた。このホトアイルは達木の東の砂地に立地しており、グン部族2世帯、タバナン部族1世帯、トゥメト部族1世帯、張部族1世帯、白部族2世帯の7世帯から構成されていた。チェン部族1世帯は1960年代に転入してきた。

彼らの父Mは張部族の娘と結婚して婿入りした世帯主である。その当時、ホトアイルでは羊約210頭を1つの群れとして放牧し、それぞれの世帯が交代で見張りを行っていた。那木吉拉[6]によると、1947年の土地改革では、1人あたり牛1頭、羊5頭の家畜の分配があった。しかし、家畜の飼養は以前と同様にホトアイル内で管理されていた。

表1 人口、世帯、家畜総頭数の変化

単位：人、戸、頭

年次	1981年	1997年	2017年
総人口	455	508	537
世帯数	77	111	183
世帯あたりの人数	5.9	4.5	2.9
家畜総頭数	9,843	12,464	30,194
世帯あたり家畜数	128	112	165

注1) 達木ガチャーの家畜・土地分配表と2017年の扎嘎斯台ソム統計により作成。

2) 家畜頭数は羊単位で計算、馬=羊6頭、牛=羊5頭、ヤギ=ヤギ1頭。

定住化政策を推進する上級組織の指示により、1975年に、祖母、両親とその子をあわせて13人が達木生産小隊に移住してきた。幼い兄弟が多く、さらに長男Qが生産小隊の「ホルシャ」<sup>注9)</sup>の仕事をしていたため、次男N（当時17歳）のみが生産小隊の労働者として働いていた。そのため、生産小隊からの報酬分配は少なく、生活は非常に苦しかったという。

図2はこの家系の男子の変化を示している。子世代では、長男Q、次男N、三男J、四男U、五男Sが結婚して新しい世帯を形成し、新たに5世帯となった。女性は結婚によって他出している。また、次の子世代については、長男Qの息子二人、次男Nの息子一人、三男Jの息子一人と四男Uの息子一人が結婚により新しい世帯を作り、5世帯が拡大して、子世代の5世帯と孫世代の5世帯を合わせて10世帯となっている。

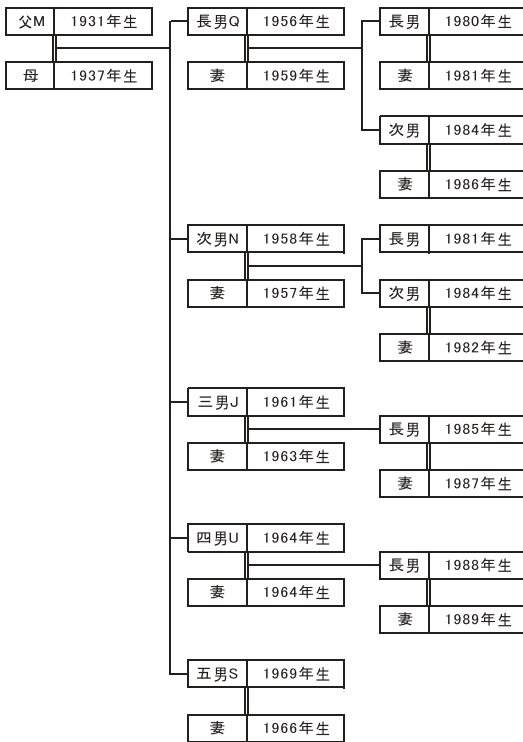


図2 事例兄弟の家族の拡大

注8) ホトとは、モンゴル語でももとは「城」あるいは「都会」を意味していたが、現在では牧畜社会の最も基礎となる生活集団を指す。アイルは牧畜民の家族の呼称である。詳しくは何[1]を参照のこと。

注9) ホルシャとは日本語で「商い」を意味する。人民公社時代においては、生産小隊ごとに一つおかれ、必要な物品を物々交換で手に入れる取引所を指した。

#### IV 相続と家畜の飼養形態の変化

事例とした世帯では1981年の家畜分配によって、家族13名（祖母、両親2人、兄弟10人）に対し、馬6頭、牛13頭、羊42頭（馬の0.5頭を羊で換算して3頭）、ヤギ3頭の家畜の分配を受けている。

長男Qは1979年に結婚してすぐ独立している。次男Nも、結婚直後は両親と未婚の兄弟8人と同居していたが、三男Jの結婚と同時に独立している。三男Jが独立したのは両親が亡くなった後である。そのため、三男J、四男U、五男Sが相談して財産の相続を決定した。兄弟それぞれの独立年、財産分与、1997年以降の土地所有、家畜数の変動などをまとめたのが前掲表2である。

1981年の家畜飼養形態では、長男を除いた次男N、三男J、四男U、五男Sの兄弟4人が家畜の群れを統合して放牧するようになった。1987年頃には兄弟4人の所有する家畜頭数が増加したため、

表2 財産分与と所有する家畜頭数の変化

単位：頭、ムー

続柄	独立年	財産分与時の家畜頭数	土地面積	家畜頭数		
			1997年	1997年	2004年	2008年
長男Q	1979	1	498.1	84	-	-
次男N	1985	70	608.2	180	440	490
三男J	1987	55	416.2	89	35	-
四男U	1992	200	428.9	158	168	372
五男S	1992	100	501.7	157	220	530

注1) 五男の調査と「1997年の達木ガチャー土地分配表」により作成

2) 羊単位で馬=6頭、牛=5頭、ヤギ=1頭で換算。



より広く牧草地が必要になり、次男Nが中アイルへオトル<sup>註10)</sup>に出た。家畜の見張り作業は次男Nが担当していた。毛刈りや羊を洗う作業には兄弟4人の家族が参加している。放牧地はガチャーの共有であったが、隣村と間に境界線はなく、家畜の放牧は主に西の砂地で行っていた。

1990年代に入ると、砂漠化を防ぐために牧草地を柵で囲んで管理するために、次男Nは現在の住居（中アイル）に移り、その周辺の牧草地を囲んで兄弟4人が利用するようになった。1992年頃には四男Uも中アイルに移住してきた。三男Jと五男Sの中アイルへの移住は1998年の洪水後である。1997年の土地請負制の実施により牧草地の使用権が個人へ配分され、長男を除いた次男N、三男J、四男U、五男Sの兄弟4人は相談の結果、牧草地を一ヶ所とすることにした。図3は2019年におけ

表3 事例兄弟の地区別の所有面積（2019年）

単位：ムー

	西の砂地	東の砂地	採草地	耕地	借地
次男N	212.5	327.0	61.2	7.5	60.0(耕)
三男J	200.0	168.4	41.8	6.0	
四男U	143.3	238.2	43.2	4.5	200.0(耕)
五男S	180.0	266.3	50.6	4.5	2,500.0(牧)

注：1）聞き取り調査と1998年の土地分配表により作成。

2）耕は耕地、牧は牧草地を示している。

る事例兄弟の牧草地と耕地の分布を、表3は兄弟の地区別の所有面積を示している。

牧草地を一ヶ所とすることの利点は、統合した家畜群の放牧が便利になる上、家畜頭数が少ない家族にとっては牧草地を共同で囲うことで、柵を購入する金額負担を少なくすることにある。

2000年代半ばには、三男Jと四男Uは牧草地を個別に管理するため、柵で囲むようになった。こ

の背景には2004年頃に、次男Nと五男Sの家畜が急速に増加する一方で、三男と四男Uの所有する家畜頭数は停滞、あるいは減少する傾向にあり、兄弟間に格差が発生したことがある。家畜頭数の増減の要因は、家畜飼養の工夫や技術水準にあるという。家畜頭数が増加するほど草量が必要となるため、頭数の少ない三男と四男Uは自己所有する牧草地を柵で囲い、個別で利用するようになった。三男は1981年から1984年まで、兵役に服しており、退役直後に変電所に就職した。そのため、1985年に独立してから家畜の世話を四男Uに依頼していた。家畜の世話を自ら管理する暇がないため、家畜頭数が停滞状態にあった。

四男Uは分与された家畜の頭数がより多かったが、そのうちには、三女、四女の結婚による持参金と家畜も含まれる。また、1992年から1994年まで妻

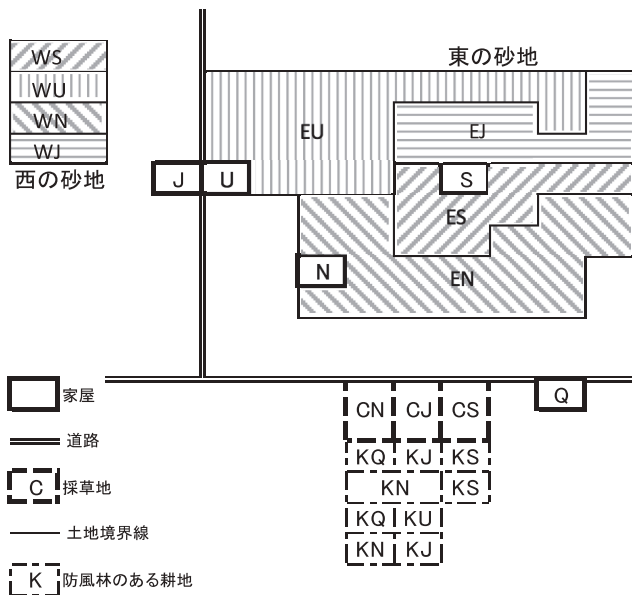


図3 事例兄弟の牧草地等の分布（2019年）

- 注1）Q、N、J、U、Sは長男Q、次男N、三男J、四男U、五男Sを示す。  
 2）家屋は三男以外、東砂地に立地する牧草地境界線の中に建てられている。Wは西の砂地、Eは東の砂地、Cは採草地、Kは耕地を示す。  
 3）長男が分配された牧草地は兄弟と隣接していないが、農地は隣接している。

が林東師範専門校に進学する際に、家畜を売却して学費と生活費に当たったことが四男の所有家畜頭数が減少した原因である。

草量不足が問題となった次男Nと五男Sはアルタイ地域へオトルに出るようになった。アルタイ地域は居住から離れたところに立地するため、柵による囲い込みがほとんど行われなかったためである。家畜は、冬期間は居住地（中アイル）で飼養し、夏はアルタイ地域へ移動する。移動するのは次男Nのみであり、彼の妻は居住地で子供たちの世話をし、病気の羊や種羊など群れに加えない家畜を放牧したりする。冬期間は、家畜を越冬用の草で飼養するため、次男Nと五男Sはそれぞれの家で家畜の世話をしていた。

2008年には、次男Nと五男Sはそれぞれの所有

する家畜頭数が増えつつであったことを理由に、牧草地の再分割を行った。そして、個別で家畜飼養を行うようになった以降は、借地により草量不足を解消するようになった。借地時期は、毎年6月1日から10月1日にかけての4ヶ月間である。

現在の五男Sの家畜飼養頭数は、羊64頭、牛118頭（繁殖牛68、子牛49（オス25、メス24）、未経産牛1）である。羊は夏期間については四男に西の砂地を無償で使用される代わりに、羊の放牧を無償で委託し、冬期間は乾草やサイレージを与えて柵で飼養している。

五男Sの子供は娘が一人のみであるが、娘は大学を卒業して通遼市札魯特旗で教師として勤め、2019年に同地の公務員と結婚している。結婚の際に、娘は持参金として家畜を牛32頭、羊40頭、馬

年次	兄弟の独立	長男Q	次男N	五男S	三男J	四男U	備考					
1979年	長男Q	経営の分離										
1981年								両親、その子を含む13人分の家畜を分配した				家畜の分配
1985年	次男N 三男J							主に草原地域と家の周辺で放牧				家は草原地域に位置する
1987年								次男Nによる西の砂地でのオトル放牧開始				
1990年	五男Sと四男U							東の砂地の囲い込み				次男N宅が中アイルへ 四男U宅が中アイルへ
1992年												
1997年								土地が分配され、兄弟4人が牧草地を一ヶ所にした				土地の分配
1998年								探草地の一部を防風林のある耕地へ造成				三男Jと五男S宅が中アイルへ
2000年												
2004年								アルタイ地域で放牧開始		東の砂地での放牧を継続		
2008年		NとSの家畜群の分割・個別化										
2010年		所有放牧地での放牧	借地放牧の開始	出稼ぎによる家畜の売却	所有放牧地での放牧、家畜の委託							
2019年												

図4 事例兄弟の独立を家畜飼養の変化に関する年表（1979-2019）

注1) 聞き取り調査より作成

2) 図の同一の塗りつぶしは共同労働組織の範囲を示し、白抜き内はそこでの放牧地の所在を示している。

3) 中アイルは調査地の中央部にある集落であり、事例兄弟の現在の住宅はここにある。



1頭の他、20万円の乗用車1台を与えられている。しかし、娘の家畜の世話は、五男S夫婦が担当しており、借地料の半分は娘が負担している。

このように、数戸の世帯が家畜を群れに統合して放牧する家畜飼養形態が個別完結的な家畜飼養へ変化したのは2008年であり、土地分配の直後ではなく世帯ごとの家畜頭数が増加した後であることがわかる。

図4は1979年から2019年にかけての40年間の家畜飼養の変化、すなわち、兄弟の独立、牧草地と住宅の変化、兄弟間の労働組織の変化を示している。

この変化過程を見ると、家族ごとの飼養家畜頭数の増加は家畜群を分割する直接的原因であり、それに従い、共同労働組織によって維持されてきた労働単位が解体され、家畜飼養形態が変化してきたと考えられる。

注10) オトルとは、現在多用されている語義では、宿営地から家畜群を切り離す放牧という意味で使用される。詳しくは利光[5]を参照のこと。

## V おわりに

以上、1981年以降の家族の分割と相続の実態、その後の家畜飼養形態の変化を、兄弟世代を分析対象として明らかにしてきた。

その結果、1981年の家畜、1997年の農用地の個別配分という制度的変化のみでは家畜の飼養形態の変化を説明できないことが明らかとなった。なぜなら、家畜は群れを単位として放牧されるため、たとえ個別の農用地配分がなされても、分割された家族による共同労働組織が形成されるからである。

調査対象においては、子世代が結婚して独立することにより世帯数は大幅に増加している。しか

し、子供に分与する家畜の頭数は多くないため、元の家族あるいは、兄弟が所有する家畜を一つの群れとして家畜が放牧していた。この家畜飼養形態は、土地分配が行われた後も変化せず継続されてきた。これは、子世代の兄弟が1997年の土地分配時に土地を一ヶ所にまとめて配分を受けるという対応を採ったことが大きい。また、家畜頭数が少なく、個別で土地を囲う柵を購入することも困難であった。

しかし、世帯ごとの家畜頭数は個人の家畜飼養作業に関する経験や工夫、世帯の支出などの違いにより、格差が生じることになった。これが契機となって、家畜の群れは分割されていった。すなわち、一事例から導かれた結論ではあるが、土地分配政策が直接的に家畜飼養形態を変化させたわけではなかったのである。

冒頭で述べたように、牧畜という生産活動は家畜と放牧地ならびに人間労働から構成される。家畜の飼養形態の変化を理解するためには、集団化の解体によって実施された家畜や草地の分割配分のみではなく、家畜の飼養形態に対応した労働組織のあり方、さらに言えば家族のあり方を検討する必要があるといえる。

## 参考文献

- [1] 何淑珍「中国内モンゴルにおける現代化と牧畜民の生活変化—シリング盟フバートシャラホショーの事例調査から」『農村社会研究』第24巻第2号、2018年、pp.26-37
- [2] 小長谷有紀「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の牧畜経営の多様化：牧地分配後の経営戦略」『国立民族学博物館調査報告』第20巻、2001年、pp.15-43
- [3] 斉穎賢「モンゴル社会における小家族と末子相続」『専修人間科学論集』Vol. 1、No. 2（社会学篇第1号）、2011年、pp.107-117
- [4] 蘇德斯琴「中国・内モンゴル自治区における

- 草地分割利用制度の導入と牧畜経営・草地利用の変化－ショロンチャガン旗を事例に」『季刊地理学』Vol.57、2005年、pp.137-149
- [5] 利光有紀「“オトル”ノートーモンゴルの移動牧畜をめぐる」『人文地理』第35巻第6号、1983年、pp.68-79
- [6] 那木吉拉『尚申毛都嘎查誌』（モンゴル語）内蒙古文化出版社、2007年
- [7] 于蓉蓉「中国黄土高原における草食家畜飼養の展開と飼料確保に関する研究」東京農業大学学位論文、2016年
- [8] 吉雅図「中国・内モンゴルにおける草原保護政策下での牧羊経営の変化－シリングル草原地域を事例として－」『農林業問題研究』第175号、2009年、pp.212-217

(2021年11月8日受理)